

### 5-1. 心にかけて、防災・減災へのヒントを拾う

自然災害は必ず起きます。しかし、その被害は工夫で小さくできます。これまでも、さまざまなことをしてきていますが、一方で自然災害を助長してしまうことも利便性や開発という理由で人による行為で人為災害が作られてきました。

次世代のために、私たちは多くの経験、犠牲から、様々なことを学んでいかなければなりません。これまでの延長で考え、実施していくことがよいのか、あるいはここで何かを変えていくべきなのか、防災や減災は決して受け身であってはならないし、今後の生活していく中でゴールの一つでなければならぬと考えます。そして、それには個人や地域といった小さい単位でこそできることがあるはずで、これまで蓄積されたところの知的財産をベースに、あらたな賢い対応を構築していくことが必要な気がします。

そして、日常的な情報には聞き留めて考えてヒントにすべきことが多くあるように思われ、関心を持ち続けていきたいと思えます。

自然災害は自然現象が人とかかわることで発生するものですが、自然現象は人によって抑制されたり抑止することができないものです。しかし、自然災害は人の在り方でさまざまな反応を示すというものもあります。人と自然とのかかわりの初期は、自然の姿を怖れつつも崇められ、それに逆らうことなくあるがままに受け止めてきたものです。つまり、上手に自然の恵みを享受し、危険なものからはひたすら避ける、かわすということをしてきたのだと思います。しかし、その後、人類は好奇心を高め生産活動が始まり、科学技術が発展するにつれて、利便性や効率化を目的にまい進します。これまでの受け身生活パターンから積極的に地形を改変するような土木事業が開発の名のもとに自然への挑戦が展開されていきます。

それは、利便性があって、豊かな生活環境を構築するためでもあります。自然のサイクルに割り込むことにもなっています。ゆったりとした時間のなかに、せっかちに割り込んでいくわけですから、そこにこれまでと異なる拒絶反応が発生します。それが、人間側にとっては都合が悪い負荷、つまり災害ということになるわけです。

したがって、自然災害は、自然現象の変化と人間社会の在り方と深く関係しているということになり、防災を考える上で学習すべきことが多々あるということになります。

あらためて防災を考えていく上で、昔の生活に戻ることはできないわけで、現状をしっかりと理解した上で、どうすれば被害を最小にすることができるのかを構想すべきです。その最小の単位として地域防災があります。自分達が居住する地域を見つめなおし、理解して、そこに存在するリスクを共有しながら、実践可能な策を考えるということが、先ずは必要であるということになると思います。地域には、地名、言い伝え、履歴や経験などの資源がありますし、人材も多く潜在していると思われれます。それを顕在化させて有効化する取り組みが必要というか有効であると思います。地域を自分の目で見ると、耳で聴く、目で確認することで、過去そして未来への備えが見えてくるような気がします。